第６版はしがき

本書の第５版を2023年４月に刊行してから、３年と半年が過ぎた。この間、2020年４月に施行された2017年改正民法についても、その運用をめぐる判例・学説の蓄積が進んできた。また、所有者不明土地問題への対応や家族法制の見直しが進められるとともに、高齢化社会の進展を背景として成年後見制度の改革を内容とする改正法が成立するなど、社会の変化に対応した法整備が続いている。

民法に関連する消費者法の分野に目を向けると、成年年齢引下げ後の若年成年者保護の問題は、引き続き重要な課題となっている。また、デジタル化の進展により、プラットフォームを介した取引やAIの活用をめぐる新たな法的課題も顕在化している。消費者取引の態様が大きく変容するなかで、こうした法的関係を規律する民法および消費者法の役割は、ますます重要なものとなっている。

本書第６版では、このような社会状況の変化を踏まえ、法改正、判例、統計資料等を可能な限り最新のものに改めた。重要な法改正としては、第14講で成年後見制度の改正を取り上げた。また改訂作業では、本書の全体構成を見直し、内容の一層の充実を図った。とくに第３講と第４講の順序を入れ替えて、新第３講を大幅に書き改め、第４講も全体の位置づけとの関係で内容を充実させた。さらに、設例やコラム、本文についても各執筆者の協力のもとで検討を重ね、読者の理解に役立つよう細かな修正を加えることで、初学者が学習の道筋をつかみやすくするとともに、より深い理解へと進むための手掛かりを提供できるよう努めたつもりである。

なお、本書の編者の一人であった潮見佳男教授のご逝去に伴い、同教授が担当されていた第１講については、本版から長野史寛教授が担当することとなった。

今回の改訂にあたっても、法律文化社の野田三納子さんには多大なご支援とご協力をいただいた。ここに記して厚く御礼申し上げる。

本書がこれまでと同様に、民法を学ぶ学生諸君にその面白さを伝え、また初学者教育に資するものとなれば、編者として望外の喜びである。

2026年10月

編者　中田邦博
松岡久和

初版はしがき

本書『18歳からはじめる民法』は、法律文化社の「18歳から」シリーズのうちの一冊として企画された。本書は、法学部生の民法入門用教科書として、また法学部生以外の教養民法用教科書として利用可能な教材を提供するため、いくつかの新たな試みを行っている。

本書の第1の意図は、大人（20歳）として扱われる直前にある人（法的には、未成年者とよばれる）に、自らの生活空間においてどのような法的な問題があるのかに気づいてもらうことにある。その解決の社会的ルールは、いうまでもなく法的なものだけではなく、複雑である。社会人としての第一歩は社会のルールを知ることから始まるといわれるゆえんである。法は、そうしたルールの中でもきわめて重要な位置を占めている。この意味で、法的問題に焦点をあわせた本書の企画は必要性の高いものであるといえよう。

こうした企画の趣旨を受けて、編者を中心とする編集会議において本書に盛り込まれるべき内容とその説明方法について議論を行った。その結果、読者が18歳という人生のステージに立っていると想定して、その目線から「18歳」の日常生活に民法がかかわっていることを意識させ、その学習への意欲を高めることに重点を置いた入門書を編集することになった。具体的には、18歳の大学生Aさん自身が日常生活において経験する可能性の高い典型的なトラブルや、あるいはAさんの見聞する（その家族、友人たちをめぐる）身近な法的問題を取り上げて、その法的問題の所在と内容をやさしく解説することで、民法の重要な骨格を提示することにした。本書の利用の仕方については、さらに、後掲の「本書の構成と読み方」を参照されたい。

本書の題名に、「18歳」とあるのは、読者が未成年者であることを前提にしているだけでなく、「18歳」が社会的には「大人」として扱われる可能性をもつ存在であることも意味している。冒頭で、大学の教科書としての利用を想定していると書いたが、本書は高校を卒業して社会人となっている18歳にもぜひ読んでもらいたい。未成年者であっても社会人であれば、「大人」＝社会人として法的問題を処理しなければならないことがあるだろう。そのときには、本書を手にとってほしい。こうした年齢層の読者に「大人」になる階段をのぼる準備の一つとして本書が利用されることを望んでいる。ひととおり民法を学んだ法学部の学生にとっても、本書は具体的な民法の姿を再発見するきっかけを与える書物として役立つのではないかと考えている。

最後に、編集の過程において編者サイドから、新しい読み物として世に出したいという思いで数々の要望を行ったが、執筆者の皆さんはこれに快く応えて下さった。ご協力に心から感謝する。本書の編集については、企画段階から、法律文化社編集部の小西英央さんと野田三納子さんに大変お世話になった。ここに、改めてお礼を申し上げる。

潮見佳男
編者　中田邦博
松岡久和